みちのく

成 人 編

令和３年度発刊

仙台矯正管区

－第４２号－

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十二号を数えております。

当管区では「みちのく書画文芸コンクール」を開催しており、本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和四年三月

仙台矯正管区

表紙の題字は久道石静氏の揮毫によるものです。

目　次

【文芸部門入賞作品】
作文・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】原田勇男 先生　2
詩苑・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】原田勇男 先生　13
歌壇・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】伊藤久子 先生　20
俳壇・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】鈴木三山 先生　25
柳壇・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】佐藤岩男 先生　30

【書画部門入賞作品】
絵画・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】桝澤　怜 先生　37
ポスター・カレンダー・・・・・・・・【選評】鈴木智枝 先生　42
毛筆・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】鈴木霽月 先生　45
硬筆・・・・・・・・・・・・・・・・【選評】鈴木霽月 先生　50

作文の部

審査員

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問

原田　勇男

医療用ガウンの製作を通して

秋田刑務所　H・K

二〇二〇年、社会ではコロナウイルスの影響で日常生活が一変しました。でも、刑務所に入っている私からすれば何の関係も無い話だと思っていました。自分が出所するまでには、元の日常に戻っているだろうとさえ思っていました。でも、社会復帰を目前に控えた今、新規感染者数は過去最高を更新する日々です。

そんな私が真剣に、コロナウイルスと向き合うようになったのは、社会貢献作業の一環として行なわれた医療用ガウンの製作に携わらせてもらってからです。まさか刑務所で、そしてまさか自分が、こんな大事な物を作るなんて思ってもいませんでした。大袈裟に言えば誰かの命を守る為の物で、そんな物を刑務所で作っていいのだろうかと思う半面で、初めて社会の為に役立てているという充実感でいっぱいになったことを覚えています。

ふとニュースの最中、医療関係の報道で看護師や医師が身に纏っているガウンに目が動いてしまいます。もしかしたらあのガウンは私たちが作ったものかもしれないと思うと、不謹慎ながら嬉しい気持ちになってしまったのも事実です。

私たちは専門業者じゃないから、多少なりとも不格好な仕上がりになってしまったかもしれませんが、一着一着に込めた思いは誰にも負けていないと思います。そしてあの一着のおかげで、知らない誰かの命が助かったり、知らない誰かの未来が明るいものへと変えられたかもしれないと思うだけで誇らしく思えます。

この社会貢献作業、医療用ガウン製作という経験は一生忘れることはないと思います。本当にいい経験をさせてもらえたことに感謝します。

そして、この経験を通して学んだこともたくさんありました。もちろんコロナウイルスに対しての捉え方や考え方というものも変わりました。でもそれ以上に、人の為に何かをする大切さというものを学べたように思います。私は刑務所にいたから医療用ガウンを製作しましたが、もし社会にいたとしたらやっていなかったと思います。でもニュースを見ていると、小さな子供から大人まで手作りのマスクや手作りのガウンなどを医療現場へと提供している光景がたくさんありました。それを見て、自分との差を大さく感じました。特に胸を打たれたのは、子供たちの姿にでした。小さな子供たちが、困っている人たちの為にと一生懸命に頑張っている姿と比べて、自分はどうだろうかと考えてしまいます。差は歴然で、子供たちの姿や姿勢からは多くのことを学ばさせてもらったような気がします。子供たちの純粋に勝るものなど、何ひとつとして無いのかなと思いました。

この新型コロナウイルスの終着点はどこにあるのだろうかと思ってしまいます。各刑務所によっても、様々な感染予防対策がとられていると思います。刑務所での規則の規制なんて、社会に比べてしまえばとても小さなものなのかもしれません。小さなものだけど、元々規制の多い刑務所生活の中で、一つ規則が増えるというのは、正直すごくストレスに感じます。でも、ストレスの感じ方は社会の人たちも同じだと思います。今はどこにいてもコロナの影響は避けられないのかもしれません。小さな子供たちでさえ楽しいはずの夏休みや冬休みが、そして春休みがと、次々に犠牲になっているようにと私には感じます。

ウイルスなんて目には見えないものだから防げない感染もあるのかもしれません。でも防げる感染も必ずあると思います。一人一人の協力や我慢で、助かる命はあるはずです。このコロナでの一番の犠牲者は、間違いなく亡くなられた方たちです。次の犠牲になってしまうのは自分もしれないと思えば、もっともっと出来ることは沢山あると思います。私のコロナに対する意識がどのくらいのものなのかは分かりません。でも、常に意識することだけは忘れずに持ち続けようと思います。

私の願いは、一日でも早くコロナが終息して、当たり前のことを当たり前に出来る日々の幸せの中で生活がしたいということです。

最後に、この新型コロナウイルスで亡くなられた方々にご冥福をお祈りしたいと思います。

寸評

新型コロナウイルスが世界中に蔓延している日々。この筆者は当初、外部と遮断されているためコロナに関心を持っていなかった。だが、刑務所内で社会貢献作業の一環として、患者の命を救うために日夜奮闘する医師や看護師が着る医療用ガウンを製作する仕事に従事して、初めて社会のために役立っているという充実感を味わった。その経験を通して再起を決意する思いを高く評価した。

八月の向日葵

青森刑務所　鳴寂

もしこの世界が明日終わるとしたら
　あなたは誰に会いたいですか？
もしこの世界が明日終わるとしたら
　あなたは何を伝えたいですか？
　　ＭＳ・ＯＯＪＡ

海を見渡す事のできる高台の墓地に彼はいた。迷う事なく歩を進め、やがて一つのお墓の前で立ち止まった。持参した二本の向日葵を供え、祈りを棒げる。長い祈りだった。彼が祈りを終えて帰路に着こうとしたその時、杖を突いた高齢の男性が、一人の女性に連れられて彼の方に歩いてきた。そして、三人の視線が交錯したその瞬間…。

彼はその夢で目を覚ました。午前七時。土曜日は彼の休日だった。いつもより一時間早い目覚め…もう眠れそうにないと悟った彼は、溜め息をついて起き上がり、コーヒーメーカーのボタンを押し、トースターに食パンをセットした。顔を洗いテーブルに座り、こんがり焼けた食パンにバターを塗る。コーヒーを飲みながら、先程の夢を思い返している。

「キンコン♪」ＬＩＮＥの通知音が彼を現実に引き戻す。派遣会社の上司からだった。

“休日のところ申し訳ない。今日出勤可能？一人欠員発生！！休出の時給３割増しです。連絡お待ちしています。”

彼の時給は１２００円、頭の中で計算を巡らす。悪くない…か。来週は家賃の支払いもあるし。彼は、了解の意味を込めた敬礼スタンプを送信した。こうして、彼の新しい一日が始まっていく。

「オーライ、オーライ、ハイストーップ！」晶は声を張り上げた。板橋区内のとある物流センター。ここで働き始めてからもうすぐ二年。転職を繰り返し、長続きしなかった晶だが、職場での気の合う仲間と巡り会い、ようやく居場所を見つけたのだと感じていた。ただ、晶は人に言えない過去を抱えていた。窃盗での数回の服役。それでも、未来の為に、自力で生きていく為に、一心不乱に働いた。

「フウー…」昼休みになり、冷たいコーヒーで火照った体を休ませる。ほっと一息ついた時、仲間が体憩にやって来た。

「今年の夏は久々に実家に帰ろうかな」

「俺は予定ないから出勤します！五割増しだし！」…確かに五割増しは惹かれる案件ではあるな…心の中で同意をする。

「皆、来週までにシフト出すように！」リーダーが指示をする。もうそんな時期か…。この時期になると、晶は心に痛みが走るのだ。

「さて、午後の部始めか！今日もまだまだ暑くなるぞ！」その一言で全員が立ち上る。晶も「ヨシ！」と気合いを入れた。そう言えば、あの日も暑い夏の日だったなあ…。ふと、そんな事を思いながら、晶は荷物の仕分け現場に向かって歩いていく。

彼は服役中に祖母が亡くなった事を知った。しかし、祖母とは一度しか会った事がない。六歳から一八歳までを札幌の養護施設で過ごした彼は、両親にも愛された記憶がない。祖母に初めて会ったのは、一九八四年、ロス五輪があった暑い夏、彼が高二の時だった。施設の先生に「室蘭に行って来なさい」と言われ、札幌駅から室蘭行きの電車に乗った。車窓から流れゆく景色を楽しんだ。まるで、小旅行のようにワクワクしていた。

駅に到着すると、一人の男性が彼を待っていた。初めて会う祖父であった。初めて訪れた母の実家には、祖父と祖母、母の妹の三人がいて、テーブルには沢山の料理が並んでいた。初対面の緊張はあったものの、笑顔で会話も弾み、食も進んだ。彼には目的があった。幼くして別れた母にどうしても会いたかった。

やがて、祖母は彼の意を察したのか、突然、「彌生の事は忘れなさい」と言った。そして「これからは、身寄りはいないと思って一人で生きていきなさい」とも言った。ショックを受けた彼は、もう二度と来るもんか！と実家を後にした。札幌に向かう電車の中で、彼は止め処なく涙を流した。それ以来、彼は記憶の蓋を閉じて生きていく事を誓ったのだ。

働き始めて四年目の夏、晶は仕分け現場のリーダーとなり、後に人事課からの推薦を受けて、契約社員となった。二年後の正社員登用も可能となる。今更ながらではあるが、人生のやり直しがしたかった。それ故、晶には過去を顧みる事が度々ある。

何故何度も罪を繰り返したのだろう…。莫迦をやり、それが自分の損になると分っていても、晶は罪を犯した。人は現実と向き合って、どこかに折り合いをつけて生きていかねばならないのに。

晶には、その事を指摘してくれた大切な人がいた。しかし、その大切な先生がもうこの世にいない事を晶は知らなかった。

二十五年振りに訪れた施設。卒園後は一度しか来園していなかった。園長先生に長らくの無沙汰を詫び、彼は施設の敷地内を歩き回った。学生時代を過ごした部屋、食堂、体育館、グラウンド…。四半世紀を経てもなお、すべてが色褪せる事なく輝いていた。彼は時が経つのも忘れ、今は亡き大切な先生の面影を探し、思い出の余韻に浸っていた…。

晶は、クローゼットの奥に蔵ってあった一つの箱を取り出した。自らへの戒めとして、捨てられ

なかったその箱…中には受刑中に使用したノートや手紙等が入っていた。その中の一通の手紙を手に取った。出所してから既に七年の月日が経過していた。

“砂時計の中の落ちきった砂は動く事はない。過去は、この動かずに下に溜まった砂と同じ。けれど、引っくり返せばまた新たな時を刻んでいける。砂が落ちる速さは決して変わらない。上手く歩かなくてもいい。一歩ずつ、晶らしく歩いていけばいいんだから。”

先生はもういない、。けれど、ここに確かな証がある、こうして、人は希望の種を受け取り、思いを紡ぎ生きていくのだろう…。晶は涙を拭き、深く息を吸い込んだ。そして、自らを浄化するかのように、ゆっくりと息を吐く。晶は、今の思いを大切に胸にしまい込んだ。そして、どうしても手に取る事ができなかったもう一通の大切な手紙を箱の中から取り出した。

彼は夢を見ていた。あの、たった三時間の短い夏の続きを。人は皆、生い立ちて心に生きる故郷を忘れはしない。彼もまた然り。苫小牧を過ぎ、車窓からは広大な海を望む事ができた。砂時計は、確実に時を刻んでいた。

“大変ご無沙汰しておりました。

私も晶が今どうしているか心配でした。この手紙を書くにあたり、晶のいた施設に連絡を取り、当時担当だった田所先生に会う事ができました。とても心配していました。

晶が室蘭に来た時、母は酷い事を言いましたね。父も母も酷い事をしたと思いますが、私が今、謝罪の言葉を並べるのは違うと感じています。

しっかりと罪を償い、自分で自分の道を見つけ、私達の前に立っても恥ずかしくないと思えるようになったなら、どうぞ母と姉に会いに来てください。父は高齢なので、その時会えるかは疑問ですが。けれど、彌生はずっと待っていると思います。子を想わない母親はいないから…”

まるで、こうなる事が必然であったかのようにたどり着いたこの場所…。彼は、海を見渡す事のできる高台の墓地への階段を、一歩ずつ上っていく。迷う事なく歩を進め、やがて一つのお墓の前で立ち止まった。持参した二本の向日葵を供え、祈りを棒げる。長い、長い祈りだった。彼が祈りを終えようとしたその時、車椅子を押した女性が彼の方にやって来た。高齢の男性が車椅子に座っていた。三人の視線が重なり合ったその時…。

言葉は必要としなかった。思いは、言葉をも超えていく。人は、互いを赦し、互いに赦され生きていくのだ。再び巡り会えたこの縁を、大切に紡いでいこう…晶は本気でそう思った。頭上に広がる広大な空は、今日も暑くなりそうな、底なしの青さを見せていた。

寸評

少年時代を札幌の養護施設で育った晶は、両親に愛された記憶がない。高二の頃、施設の先生に言われて室蘭へ行き、祖父母に会ったが、母には会えなかった。祖母から母を忘れて一人で生きるように言われた。罪を犯した晶は服役中に祖母を失った。出所した晶は物流センターに勤め、社会復帰を果たした。そして夢にまで見た海の見える高台の墓地で、晶は高齢者の車椅子を押す女性と会う…。今回も切れ味のいい短編が印象的だった。

福島刑務支所　A・R

「毎日元気にしている？ママは相変わらず元気だよ。いつも手紙ありがとうね…」

私が服役するようになってから、七年という月日が経ち、母と離れてからは八年という月日が経った。この七年間、　私には毎週欠かさず手紙が届いている。それは「母からの手紙」だ。

私には小さい頃から父親がいなかった。だから母は、私を育てるために毎日のように働いていた。父親がいなくて寂しい思いをしたことはあったけれど、私は母のことが誰よりも大好きだったから、父親がいないことに対して不満を抱いたことは一度もなかったと思う。母はとにかく自由で優しかった。小さい頃から私は、自分のやりたかったことは何でもやらせてもらっていたし、欲しいものもほとんど与えてもらっていた。きっと自分の全財産を私に費やしていたんだと今なら分かるけれど、当時の私はそんなことは何も考えず、少しでも母が自分の思い通りに動いてくれないと、次第に反抗するようになっていった。

高校に入学した頃から私は家にあまり帰らなくなり、不良グループみたいな子達と一緒に悪さをするようになった。その当時はお金もなく、化粧品や洋服を私はいつも盗んでいた。

「あんた、その服どうしたの？」

私の部屋にある洋服を見てある日母は尋ねてきた。

「パクッた。だってあんたが金くれないから仕方ないじゃん」

そんな最低な言葉を母にぶつけていた。

それなのに次の日の朝には、テーブルの上に千円札が何枚か置いてあり、

「大切に使ってね」

と母からのメモが横にあった。私はその度に後悔はしていたけど、母に謝ることはしなかった。

私が学校で問題を起こす度に母は何度も頭を下げていた。私は母がいなかったら高校を卒業することはできなかっただろうし、早くに退学させられていたと思う。

社会人になって私は当たり前のように水商売の仕事に就いた。母はそのとき反対することもなく、

「あんたが一生懸命働くんだったらそれでいいんじゃない」

と私を応援してくれた。私にとって水商売の仕事は初めて一生懸命夢中になって努力できたことだったのかもしれない。きっと母はそんな私の姿が嬉しかったから応援してくれていたんだと思う。久しぶりに実家に帰ると、私の写真や雑誌が何冊も置いてあった。照れ臭かったけどそれはそれで嬉しかった。私は母の前で素直に気持ちを伝えることが中々できなかった。でも母を喜ばせたくて、沢山のプレゼントを渡した。きっと母は　私が買ってプレゼントした物は、今でも大事に使ってくれている。当時の私は親孝行というものは、何か物を買ってあげることだと思い込んでいた。

だけど二十二歳になろうとするとき、私は母の前から姿を消した。

その頃の私は仕事は何もかも上手くいっていて、何不自由ない生活をしていたのに、私は何もかもを捨てて、母だけではなく皆の前から姿を消した。

誰よりも大切な人がいた。私はその人を守りたくて、その人を守るためなら善悪とかそんなものは存在してないと思った。だから私はその人と消えた。正気ではなかった。気付いたときには私は留置場の天井を見上げながら、「ママは自殺しちゃうかもしれないな…これからどうやって一人で生きていこうか…」

などと私は考えていた。後悔とかよりも自分の人生に対する絶望感の方が強かった。

でも一年後のある日、母が突然面会に来た。すごく驚いたけれど、久しぶりに会う母はいつもの母の顔で、私は急に寂しさが込みあげてきて涙が止まらなかった。

「あんた大丈夫？また痩せたんじゃないの？」

と言う母の顔も涙でいっぱいだった。私はそのとき泣いている母の姿を

初めて見た。後悔、絶望、寂しさ…色んな思いが頭の中をぐるぐる回って、死んだほうがましだ…と思ったりもしていたけど、心のどこかで、「この人の場所に帰りたいな…」と私は強く思った。

七年前のその日から今日まで毎週欠かさず届く、母からの手紙が今の私を支えている。

そんな母にいつか私は親孝行がしたい。

でも私は親孝行とは何なのか分からず、何か物をプレゼントすることでいつも満足していた。だけど今の私は母に何かをプレゼントすることもできず、何ができるのかと悩んでいた私にある人が教えてくれたことがある。

「一生懸命生きること」

私が一生懸命生きることに何か意味があるのかな…と言われたときは思ったけれど、どんなことからも逃げないで一生懸命生きることが今の私にできる精一杯の親孝行なのだ。一生懸命生きることが、何より母のためなのだから。

「あんたが私の生きがいだよ」

先日の手紙にはそのように綴ってあった。

「ああ、そうか…私が一生懸命生きていることは母にとっては一番嬉しいことなんだ…」と今更ながら気付いた。私が母に出来る最大限の親孝行だと。

私はこれから先、母のことをずっとずっと大切にしようと誓った。もちろん母だけではなく、自分の大好きな人達皆のことを。大切な人を大切にすることが私はあのときできなかった。私が大切にしていたのは自分の気持ちであって、相手のことではなかった。本当は大切な人に順番なんてないのに、皆大切なことに変わりはないのに、いつの間にか私の中の大切な人に順番がついてしまっていた。七年経って塀の中でようやく私はそのことに気が付いた。

私が社会に戻る日が来たときは、母に一番に「私の母でいてくれてありがとう」と伝えたい。いつも恥ずかしくて中々言えない「ありがとう」を。

その日のために私は今日も一生懸命生きようと思う。大切な母を守るために。

寸評

服役してから七年。母から毎週手紙が届く。小さい頃から父はいなかった。母と二人で生きてきた。母は子育てのために働き尽くめだったのに、思春期を迎え反抗的になった。

高校卒業後、水商売の道に入った。母に自分の気持ちを素直に伝えられなくて、親孝行は物をあげることだと思い込んでいた。服役してから、母の気持ちがわかるようになった。今は「一生懸命生きること」で母に親孝行しようと思う。この気づきに胸を打たれた。

宮城刑務所　力風

――やりました日本の中条環奈！東京五輪ニッポン選手金メダル第一号です！――

隣で一緒にテレビで観戦していた夫の孟が軽く唇を噛み席を立ち、冷蔵庫へ今日四本目だか五本目の缶ビールを取りに行った。夫にもまだ割り切れぬ思いがあるのだろう。テレビでは興奮覚めやらぬアナウンサーが、まだ中条環奈の金メダルを騒ぎ立てている。

柔道女子４８kg級ではヤワラちゃん以来となる金メダル。自国開催の五輪なので日本選手にとっては有利とはいえ、環奈は初戦から圧倒的な強さを見せつけてオール一本勝ちで金メダルを掴み取った。試合に向けての調整は上々だったと、先月環奈が電話で言っていたのは、誇張ではなく本当の話だったのだ。

「鈴先輩、私絶対金メダル取ってきますからちゃんと見ててくださいね」

「当たり前でしょ。あんたが金メダルを取らないで誰が取んのよ。だけどあんた、決勝だとかここぞという大一番でたまにポカするところあんだから気をつけなさいね」

「はい大丈夫ですよ。仕上がりも順調で、今の私、誰にも負ける気がしませんから」

「へぇ、そんなに言うなら負けたらあんたの奢りで焼肉食べに行こう。残念会として」

「何で私の残念会が私の奢りなんですか！いいですよ、それならその変わり祝勝会は先輩の奢りで高級焼肉食べに行きましょうね」

「いいよ。お金払うのはどうせ旦那だし」

そんな会話を思い出してひとり苦笑いをしていると孟が缶ビールと何処に隠していたのか、特大パックのおつまみ詰め合わせを持って隣に座った。プシュウとビールを開ける。

「何笑ってたんだ。鈴は悔しくないの？」

「もう今更悔しくもなんともないよ。それよりその詰め合わせ何処から出てきたの？」

悔しくないというのは半分嘘。しかし、環奈の活躍は素直に嬉しく思っている。

私と環奈は高校大学と同じ学校の柔道部の仲間であると同時に、同じ階級で競い合う最大のライバルでもあった。環奈は私が高校三年生の時に新入生として同校に入学してきた。私はその前の年まで高校四冠を達成しており、その年に招致が決まった二〇二〇年の東京五輪代表の最有力候補と言われていた。しかし、環奈が高校へ入学してからは二人の実力は拮抗し、三年時のインターハイでは一年の環奈にチャンピオンの座を奪われてしまった。その後大学でも一緒になった二人は、学生チャンピオンはおろか世界大会日本代表の座もかけて争うライバルとなったのである。

ライバルと言っても私たち二人は決してギスギスした関係ではなく、お互いを認め合い、切磋琢磨してここまで競い合ってきた仲だ。部活の時間以外でも、恋の話や好きな芸能人の話で盛り上がった。私はジャニーズ好きで、環奈はイケメン俳優の出てるドラマは全部見てると豪語する。要するに二人ともイケメン好きの女の子だった。

イケメン好きな私が何故ゴリラ顔の孟と付き合い結婚までしてしまったのか、友人たちの間では今世紀最大の七不思議のひとつとなっているらしい。環奈だけはお似合いのカップルですよと、私と孟が付き合いはじめた頃から応援をしてくれていた。

孟は私の一つ年上で、同じ大学の柔道部員だった。実力はいいとこ全国ベスト１６止まりの成績であったが、本人も早い段階から自分の限界に気づいていて、大学卒業後は現役選手から引退して指導者になる道を選んだ。そして孟は卒業後もそのまま大学に残り、女子柔道部のコーチとなった。その時私は四年生。実際、孟のコーチの腕は素晴らしく、私たちは試合で結果を残せるようになり、私は世界選手権で初めてのチャンピオンになれた。

私と孟が交際するようになったのは私が大学卒業後に実業団入りして一年目のこと。なんか調子がおかしいなと思っていたらそこから抜け出せなくなっていて、所謂スランプで悩んでいた私が、大学のコーチだった孟に電話で相談したのがきっかけ。その時の孟の的確なアドバイスで調子を取り戻せた私は、ゴリラ顔の孟がとても格好よく見えてしまったのだ。そこから私は何度も孟を食事に誘い、なんと一年後に結婚。私も驚きの急展開だ。

しかし結婚したことで大学コーチの孟は、東京五輪の同じ階級の代表を争う私と環奈の間に挟まれることとなった。そこで孟は大学のコーチを辞めて私の専属コーチとなったのだ。行く行く母校の大学で監督になりたいと、結婚前に話していた孟にとって、大学のコーチを辞めることは苦渋の決断だったに違いない。とにかく、こうして夫婦二人三脚で東京五輪を目指すことになったのだった。

何もかも順調で、五輪代表に必ずなれると思っていたのに、結局、私は環奈と代表争いをすることもなく、今こうしてライバルの栄冠を孟と一緒にテレビで眺めていた。

二〇二〇年、この年の主要大会の結果で女子４８kg級の代表が決まることになり、私も環奈もこの大会にピークを持っていけるように調整をしていた。

――だけど、私たちにとって人生がかかっているとも言える大会は、新型コロナウイルスの世界的流行であっけなく中止になってしまう。そして政府とオリンピック委員会は東京五輪を一年延期することを発表した。

アスリートの誰しもが、この延期によって少なからず何かしらの影響を受けたことだろう。緊張の糸が切れてしまった人や、年齢的に今年が最後のチャンスだったと延期した五輪への出場を諦めた人たちもいる。私も五輪の延期で調子を狂わされたアスリートのひとりであったが、国内、国外の大会がまた開催されるようになるまで、日々のトレーニングを欠かすことはなかった。

そんな私の挑戦を嘲笑うかのような負の連鎖がはじまったのは、秋も深まりまだ日も出ていないある日の寒い朝だった。

その朝私は目を覚ますと、日課にしている走り込みに行くための準備をしていた。いつもなら孟も一緒に走り込みに付いてくるはずなのに、その日は「ちょっと体調がおかしいので、ひとりで走ってきてくれないか」と布団から出る気配もない。まいっか、と私はまだ暗く開けていない街へひとり走りに出た。

一時間後、私が家へ帰ってきても孟は布団の中でつらそうに寝ていた。私は不安になる。

「そんなに調子悪いの？熱は？今はこんな時代だし、心配だから念のため病院に行って診てもらおう。ＰＣＲ検査もしてみよう」

私はそう言うと、コロナウイルスに感染していたら、五輪はどうなってしまうのだろうと考えながら、孟を病院へ連れて行った。

結果、孟は陽性でコロナウイルスに感染していて、濃厚接触者の私も陽性反応が出た。

感染対策には人一倍気を遣っていたし、不必要な外出も私たちは出来るだけ避けていた。もちろん周りにも感染した人はいない。一体、何処で誰に伝染されたのか。どちらが先に感染していたのかもわからない。

こうして私たちは数週間、隔離施設で別々に過ごすことになった。

退院後、私たちはこれまでの休みの分を取り戻すかのように。激しいトレーニングに打ち込んだ。それで無理が祟ったのかもしれない。復帰後二か月が経った頃、実業団の部員と乱取り中に昔傷めたことのある左膝を捻り、靭帯を損傷してしまった。そして、この春に行われる予定の代表選考を兼ねた大会への出場を棄権することになり、危なげなく優勝した環奈が柔道女子４８kg級の代表に選ばれた。

あの時、怪我をした本人の私より孟の方が深く落ち込んでいた。コロナウイルスの感染も自分のせいだと思っているに違いない。孟はいい夫だ。私にはもったいないくらいにいい夫。でも、なんでも自分のせいだと嘆いている姿には少しだけイライラさせられる。その癖「鈴は悔しくないの？」などと、私がまたやる気になるのを待っている。

――私はまだ充電中だ。これから何をするかなんてまだ考えてもいない。

テレビでは環奈へのインタビューがはじまっていて、次の目標について質問をしている。

――では中条選手の次の目標は何ですか？やはり三年後のパリで、オリンピック二連覇をすることになるのでしょうか？――

――そうですね。三年後のパリでも金メダルを取りたいですけど、それより先に、尊敬する鈴さんと今度こそちゃんと代表争いをして、鈴さんに一本勝ちしたいです！――

画面の中にもうひとり、私が立ち上がることを待っている人がいる。孟が私を見る。

「しょうがない。また明日から頑張るか！」

笑っている孟から柿の種の袋ごとひったくると、私はピーナッツを一粒口へ放り込んだ。

寸評

東京オリンピックを題材に、女子柔道４８キロ級の選手二人の精進と友情を取り上げている。鈴と環奈は高校大学と同じ学校の柔道部に所属する先輩後輩でライバル。鈴は左膝を負傷し、代表選考を兼ねた大会を欠場、代表になった環奈はオリンピックに出場し、金メダルを獲得した。テレビを観ていた鈴に、抱負を聞かれた環奈は鈴の快復とパリ五輪を目指してお互いに競り合いたいと話した。二人のさわやかな友情が未来へと続く。

初めて絵を買った日

山形刑務所　全安通交

初めて自分の店を持ったとき、私は一枚の絵を買った。店奥の壁が殺風景だと思ったのだ。花を飾ってもいいが、お金と手間がかかる。造花ではいかにも場つなぎに置いたのが滲んでしまって味気ない。だから絵にしようと思った。なにか見ていて気持ちのいい絵を飾ろう。

スマホで検索すると安価な複製画をたくさん置いているギャラリーが隣駅にあった。私は自転車にまたがるとギャラリーへと向かった。桜がつぼみを震えさせている肌寒い午前中のことだった。

私は二十四歳だった。二日後に迫った店のオープンの支度で連日ろくに眠れていなかった。

二十歳を過ぎてもやりたいことが見つからなかった。ふらふらしていた私は一本の映画を観てバーテンダーになろうと思った。酒はあまり強くなかったが、スマホで求人を探してアルバイトの口を見つけた。

四年で独立するには不安が強かったが、常連客の紹介で駅前の古いビルの店舗を格安で使わせてもらえることになった。十坪にも満たない小さな店だが、小綺麗な内装に胸が躍った。

数年前、バーの店長に貰ったブルゾンにくたびれたジーンズ姿の私は教養も無く、金の無い若者に見えたのだろう。いらっしゃいと応じたギャラリーの店主は私を見て、にこやかな笑みを浮かべたまま、さりげなく一万円以下の手頃な絵を手に取りやすい位置へと並べ替えた。レジ横に置かれたラジオからは古い洋楽が流れている。冷えて痒くなった鼻をこすり、私は店のあちこちにしゃがんで、山と積まれた絵に見入った。

長い時間が経った。数人の客が訪れ、私の横で絵を選んでレジへ運び、もしくは何も買わずに去っていった。私はもともと絵を見るのは好きだった。しかし買ったことは一度もなかった。私は一枚、また一枚と丹念に絵を眺め、見終えた山をもとの場所へ戻した。いくらたくさん見ても疲れない。それどころか確かな予感があった。私は今日、なにかに会う。なにか、私にとってとても大切なものに会う。頭の片隅で花のつぼみが一枚一枚開いていくかすかな音が鳴り続けている感じだった。

コーヒーの匂いがした。振り返ると初老の店主が二つ用意したてマグカップの片方をこちらに差し出し、私の顔を見て片手を上げた。

「気にせず続けて。私が飲みたかったんだ。喉がかわいたらどうぞ」

私はありがたくコーヒーを貰い、一口含むとテーブルの上へマグカップを置いた。店主は私のそばへ寄り、私が絵をさばいていく手元をしばらく眺めていた。私がどのような絵を探しているのか測るような目だった。

「絵を買うのは初めてですか」

「はい」

「初めて買う絵は、意味を持ちますよ」

しばらくして店主はレジ奥の部屋から紙袋に包まれた絵の束を持ってきた。

「これは複製画ではなくオリジナルです。持ち込みで預かった絵ですが、あなたは気に入るかも知れません。まだあまり知られていない画家なので、お安くしますよ」

私は頷き、店主から絵の束を受け取った。

一枚目から目を引かれた。絵の世界に飲み込まれ、カンバスの奥、二メートルぐらい先に立っている気分になる。

どの絵も画面はシンプルだった。空の面積が広く、都市や建造物が淡々とした遠景で描かれている。色使いに独特のルールがあるようで、白やグレーの無彩色を基本とする中に、さっと一筋、濡れたように鮮やかな色が流されている。きれいなものが黙って遠くで光っている。そんな絵だった。

好きだ。この画家の絵が欲しいと思った。最後の一枚にたどりついた。カンバスに目を落とした瞬間、耳を失ったような雪景色に取り巻かれた。銀色の雪が降りしきる平原。建造物は何一つない。なんだか雪片の一つ一つがちらちらとまたたくようで、よく目を凝らしてみると、雪の影がごく淡い薄紅色に塗られているのが分かった。これは雪ではなく、桜の花びらが舞っているようにも見える。きっとこの絵は見る人によって見え方が変わるに違いない。

不思議な絵だ。明るいのか、暗いのかもからない。ただ、さあさあと画面の上から下、下から上へと自由に流れていく色の動きが見えるようだった。

自分がこんな極端な絵に惹かれたことが意外だった、縦３０センチ横５０センチくらいのこの絵は店の壁に掛けるのに丁度よさそうなサイズ感だった。裏面に貼られた値札シールを見ると、たったの五千円だった。私は即決した。あのとき買った絵は、経営に失敗して店を畳んで無一文になっても手離さなかった。今は実家で私の帰りを待っている。

寸評

初めて自分の店を開く時、壁に絵を飾ろうと思った。絵を見るのは好きだったが、絵を買ったことはなかった。画廊で絵を探した。画廊主の勧めで一人の画家の作品に出会い、気に入って絵を買った。銀色の雪が降りしきる平原。雪片が淡い薄紅色に塗られているようで、桜の花びらが舞っているようにも見える。一枚の絵と出会う過程が興味深かった。経営に失敗して閉店したが、その絵は実家で出所を待っている。

山形刑務所　猫背初号機

高三の夏、俺は進路で迷っていた。就職は嫌だし、受験勉強もしたくなかった。そこに運良く陸上の成績で声をかけてくれた大学があった。俺はすぐに陸上推薦で進学することに決めた。大学で何かを学びたい訳でも、陸上を頑張る気もなかった。高三の夏で燃え尽きていて、タイミングを見て退部することを考えていた。

大学入学後、すぐに関東インカレという大会があった。うちの大学を含め、関東にある多くの大学が最も重要視する大会である。参加標準記録を切っていれば、基本的に誰でも出場できる。俺も高校時代の記録が有効期間内だったため、出場することになっていた。前述の通り、競技に対しやる気はなかった。ただ、仮にも推薦入学した選手が、一ヶ月もしないで辞めるというのは、自身の今後の世間体的にも気が引けた。こうして仕方なく出場した訳だが、これが人生の転機となる。

俺は１１０ｍハードルに出場した。自身の気持ちとは裏腹に、自己新記録で予選を通過。あれ？俺ってばイケるのか？と調子に乗って迎えた準決勝。周りの走りに圧倒され、思うように体が動かず、百分の一秒差で決勝を逃した。悔しかった。そしてやる気に火が点いた。単純だがとにかく悔しかったのだ。

大会後、練習に精を出すようになった。二時間半かけて電車通学していたので練習日の帰宅時間は夜十一時近くになった。次第にこの遅い帰宅が嫌になり、大学近くに下宿していた同級生Ｙの所に泊まるようになった。

同じ陸上部でもあるＹは、陸上が大好きな奴だった。　四六時中陸上のことを考えていて、休日には日本や海外のトップ選手の走りを見て研究していた。そんな彼の家に泊まる訳だから、すぐに俺も彼の影響を受け、陸上にさらにハマっていった。夢中になって陸上談義をし、気づけば朝方、なんてこともよくあった。お陰で講義によく遅刻したものだ。何のために大学近くに泊ったんだか。閑話休題。

こうしてあっという間にＹと仲良くなった。日々の練習でも互いの走りを動画で撮り合いそれを見ながら意見を言い合って改善に取り組んだ。部の全体練習日以外の日でも、二人で自主トレをするようになった。全ての行動が〝陸上のために〟になっていた。そんな日々が本当に楽しく、充実していて、入学時の無気力な自分がいつの間にかいなくなっていた。

そんなＹとの日々が三ヶ月ほど経った初秋。短距離をしている二人の先輩が、俺達の練習に加わりたいと申し込んできた。なんでも俺達が毎日楽しそうに練習している姿を見て自分達もそうなりたいと思ったからしい。同好の士を拒む理由などないので快諾した。二人はとても気さくで温厚な人達で、生意気な発言を受けても意に介さず仲良くしてくれた。先輩後輩の間柄ながら、俺達は〝友〟になった。

人数が四人になり、より濃厚で充実した日々を送ることができた。夕方から行われる全体練習後には、先輩二人と共にＹ宅へよく泊まりに行った。１Ｋのアパートに大の男が四人なので、狭いことこの上なかった。それでも、それが気にならないくらい楽しい時間だった。陸上談義、学生生活、将来の進路、恋愛、バカ話などなど、たくさんのことを語り合った。秋、冬があっという間に過ぎた。

そして春。新入生も入り、去年涙を飲んだ関東インカレを迎える。秋・冬の間、個々の走力を上げる練習に加え、リレーの練習も行っていた。俺を除き、三人はリレー経験が豊富だった。そのため、まずどの走順が俺に合うのか色々試した結果、アンカーに決まった。理由は「バトンパスがヘタすぎる」からだった。即決だった…。

日々の特訓のお陰で全員タイムが向上した。最も速いのが色黒先輩のＳ。次が俺。三番目に大柄マッチョのＯ先輩。そしてＹが続く。俺はハードルをやってきたお陰か、後半が特に速いと分かり、結果的に四走向きだった。Ｙはタイムこそ四番手だが、初速が速いため一走適任だった。Ｓさんはカーブ走が速かったため三走。エースが多く走る二走には、筋トレで鍛えた？メンタルの強さからＯさんが入った。パズルのピースのように入るべき走順にはまった。そして関東インカレを迎えるその日まで、毎日バトン練習をし、強豪校にも負けない抜群のバトンパスを手に入れた。

二度目の関東インカレ。俺はまずハードルに出場した。予選は自己新記録で一着ゴール。今年はイケる！と思ったのが悪かったのか、準決勝では力みから走りが固くなり、千分の一秒差で決勝を逃した。数cmの差だった。

またしても準決勝で敗れ、悔しくて仕方なかったが、今年はまだリレーがある。この悔しさをリレーにぶつけようと心に誓い、リレーに備えた。

体は熱く、心は冷静に。リレー予選でこの教訓を身をもって知る。
悔しさから勝つことだけに目がいき、仲間の走りや調子を見れず、自分のことも見えていなかった。早く、速く走ろうと気が急き、Ｓさんとのバトンパスのために設定したスタートのタイミングより早く出てしまった。Ｓさんの「待って！」の声で減速し、ギリギリでバトンが渡った。そのあとの走りは、「クソッ クソックソッ」と思いながらガムシャラに走った記憶しかなかった。
全組が終わるまで予選通過できるのか分からない状況だった。そしてギリギリ通過することができた。皆、半ば締めかけていた。九死に一生を得る、という意味を肌で実感した。
大会は土日のみの二週間、計四日間で行われる。一週目の土日で天国と地獄を味わった俺達は、次の土日まで反省と改善に取り組んだ。実はあの時、周りが見えなくなっていたのは俺だけではなかったのだ。俺達のリレーの持ち記録は、例年なら決勝にもいけるものだったが、これまで一度も決勝へ行ったことがなかったため、プレッシャーになっていた。Ｙはスタートで出遅れ、Ｏさんはバトンでミスし、Ｓさんはカーブで外に膨らんでしまっていた。全員がベストと程遠い走りだった訳だが、それでもバトンが最後まで渡り、予選通過もできたのは、築き上げてきたチームワークとバトンパスの技術のお陰に違いない。俺達は反省会のまとめとして、「今までやってきたことに自信を持とう。そして仲間を信じて今自分ができるベストを尽くそう」と、結論に至った。準決勝は土曜の早朝に始まる。
俺達はギリギリでの予選通過の代償として、最もカーブのキツイ一レーンに割り振られた。加えて、内側のレーンはフィールドとトラックを仕切る金属レーンになっており、最も走りにくい。けれど俺達はもう慌てたりしない。“こいつらとなら大丈夫”という自分も仲間も信じられる心境になっていたからだ。
「オンユアマーク」と審判の声がスピーカーから聞こえる。Ｙがスタートブロックに脚をつけ、両手をトラックに置く。右手にはスチール製のバトンが握られている。
「セット」第一走者が腰を上げる。五輪が行われたスタジアムは静寂に包まれる。
パァァン！号砲が鳴り一斉に走り出す。中でもＹが頭一つ抜け出している。気づけばもう二走へのバトンパスだ。Ｏさんが絶妙なタイミングでスタートしバトンを受ける。周りのエース級に食らいついている。三位か四位か。Ｓさんにバトンが渡る。バトンパスの間に順位を一つ上げたようだ。Ｓさんは急カーブでもものともせずインコースを攻めてくる。俺はトラックに貼った白いテープを見つめる。のさんがこのテープに達する瞬間に全力で走り出す。彼が追いつくことを信じて。後ろから「ハァァイ！」と聞き慣れた声がする。俺は反射的に左腕を後ろへ振り上げる。そしてスチールの感触が手の平にしっかり伝わる。皆の思いが乗っかっているかのようにバトンが熱い。そのバトンを握っていると、力が沸いてくるような錯覚を覚える。俺はただひたすらゴールだけを見て走る。今まで感じたことのないスピード感と心地良さを味わいながら、雲ひとつない五月空の下、トラックを駆け抜けた。
結果は、チームベストを大幅更新しての一着だった。それは、皆がそれぞれの全力を尽くし、互いを信じ合えた証に違いなかった。
その後の決勝では、雰囲気に飲まれ四位だったが、それでも俺達は満足していた。それくらい準決勝の走りはすごかった。あの感覚は一生忘れないと思う。
彼らと過ごした日々も忘れないだろう。汗臭く、女っ気などなかったが最高の青春だった。あの日々は今も事ある毎に、俺に仲間と何かを成し遂げるまでの過程の素晴らしさと、成し遂げた時の心の充足感を思い出させてくれている。

寸評

高校で防上競技の選手だった若者が推薦で大学に入り、関東インカレで活躍する様子を書いている。Ｙという陸上部員と親しくなり、彼の部屋に寝泊まりして陸上に打ち込む様子が描かれる。特に、先輩二人が仲間に加わり、４００メートルリレーでインカレに出場。予選で一位、決勝で四位に入賞するラストシーンは迫力がある。スポーツに打ち込んだ青春の輝きが明るく表現されている。

詩の部

審査員

日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問

原田　勇男

約束の詩(うた)

福島刑務支所　M・M

もしも…もしもまた　さみしさや
弱い自分に負けそうになったら
どうかこの詩を思い出してほしい　約束だよ
背負ったものの重さや道の険しさに
自分を責め涙にくれる日々だったけれど
いつも側には励まし合える仲間がいてくれた
導いてくれる師との出会いもあった
どれほど救われ心強くなれたことだろう
そんな出会いが道標となり
歩んでこられたんだ　なんと大きな恩だろう
やがてはそれぞれの道に旅立つ仲間達よ
私は誓う　もう二度とここには戻らぬと
それが唯一できる恩返しだから

自由な世界は誘惑と苦悩に満ちている
日々は迷いと自分との戦いの連続だ
時に自らの手で目を塞ぐこともあるだろう
暗闇の中で方向を見失うこともあるだろう
大きな流れの中に漂うことしかできぬ
無力さに打ちひしがれることもあるだろう
それでも私は誓う　これが今生の別れだと
だからあなたも約束してほしい
『自分にはこんな生き方がお似合いだ』
なんて嘯くのはやめにすると
限られた命の時間を無駄にしないで
私は生き抜く　だからあなたも生き抜いて

あなたが選ぶ道が正しいかなんて
私にはわからない　ただ信じたいと思うだけ
たとえ思い描いた人生と違う道に進むことになったとしても誇り
を失う道でなければいい
強くなった自分を信じて歩いていこう
もしも…迷いの中で流されそうになったら
この詩を思い出してほしい　この約束を…
見上げた空の下のどこかで
ともに戦っている仲間がいることを
けして独りじゃないってことを

寸評

同じ施設で共に過ごした仲間たちへの心のこもったメッセージが胸に響いた。いつも励まし合える仲間と導いてくれた師への感謝を忘れない。これから戻る世の中は自由だが、誘惑と苦悩に満ちている。だから「暗闇の中で方向を見失うこともあるだろう」が、「限られた命の時間を無駄にしないで／私は生き抜く　だからあなたも生き抜いて」と励ます。

もし負けそうになったら、「この詩(うた)」を思い出してほしいと呼びかけている。

揺れるマリーゴールド

宮城刑務所　H・N

入浴場へ向かうお盆の午後　通路脇花壇に“マリーゴールド”が
咲いている
花に詳しくない私　当然花壇の立札で知る
この二～三年の間に　ヒットした歌に
同じ名前の歌があることを思い出した
「麦わらの　帽子の君が　揺れた　マリーゴールドに　似てる」
何故かその一節だけが　耳に残っている
それだけ頻繁に耳にしたからだろうか
そう考え　ふとマリーゴールドをチラリ
なるほど　確かに麦わら帽子に見える
と思った刹那　深い衝撃とともに
私の記憶が甦ることとなった　それは
花好きだった　亡き母の言葉であった
「これはねぇ　マリーゴールド　アンタにそっくりでしょう　麦
わら帽手を被り　遊んでる姿に　本当そっくりねぇ」と
嬉しそうに笑いかける　母の姿とともに
何故今まで　忘れていたのだろうか
他にも　母から教わった　花達の名前は
たくさんあった　でもそれらの殆どは
記憶の中に　埋もれたままである　その日
私は母の言葉の記憶の証拠を発見する
麦わら帽子を被り　マリーゴールドと
一緒に笑う　自分の写真　その視線の先は
私に何かを話しながら 微笑む母が
カメラごしに私を見ているのだろう…
私の記憶の中にも　写真の中にも　母が
麦わら帽子を被っている姿は見つからない
ヒットした歌の歌詞が耳に残っていたのも
幼い頃の実体験が　残っていたからだろう
幸せ一杯の 麦わらの僕は　母の愛情を
全身で受けていたことを　思い出した
花が　歌詞が　写真が　思わぬ亡き母との
邂逅となった　きっと情けない私を心配し
お盆に来てくれたのだろう　今度は母が
揺れるマリーゴールドになって…　私は今
そこを通る時　自然と背筋が伸びている…

寸評

詩というより散文に近い作品だが、マリーゴールドの花をめぐって、幼少の頃に母と過ごした思い出を生き生きと綴っているのに惹かれた。母がマリーゴールドは麦わら帽子を被って遊んでいる子どもの姿に似ていると話していた。それはこの世で生きている最も幸せな時間だったのかもしれない。麦わら帽子にも似たマリーゴールドが醸し出す甘美な記憶がみずみずしく表現されている。

幸せだから笑ってるんじゃなくて

福島刑務支所　N・A

朝は鳥のさえずりで目が覚めて
音楽を聞きながら、髪をきつくしばって仕事へ行く準備をする
職場へ行く道の空には大きな虹があって
新緑の匂いが私の心を豊かにしてくれる
皆でラジオ体操して身体に気合いを入れて
元気で快闊な声で仕事をして
友達とは井戸畑会議で好きなお菓子は何って
熱くしゃべったりして気分転換して
職場の皆とお昼食べて午後のパワーを養って
仕事が終わったら寄り道しないで早く帰って
晩ご飯の準備しながら皆で今日の仕事の成果を披露し合って「頑張ったよね！」って
ＴＶ観ながら、もう小腹空いたねって笑って
明日の仕事の為にＴＶも早めに消して
少しだけ音楽を聞きながら眠りについて
今居る場所がどこであっても
豊かな心持ちであれば何も関係なくない？
大切なのは、地位や名誉やお金じゃなくて
どこに居ても何をしていても
変わらない穏やかな心と豊かな想像力
それがあれば、どこに居たって関係ない
苦しい時、私は笑顔で幸せを味方にするし
幸せって環境じゃなくて、自分の心が作り出すものって知ったから
私、もっと心豊かに幸せに暮らしたいから
自分を労い、人には心を込めて接する
自分がして欲しい事は人にもしてあげる
歯ミガキしない日が無いように、人に優しくしない日が無い方が
気持ちが良いから
豊かな想像力を持てば、強くなれて、他人に優しく出来て、笑顔が幸せ連れて来てくれる
幸せだから笑ってるんじゃなくて、
笑ってるから幸せがやってくる！
ほら、上向いて、微笑んで、想像してみて
なりたい自分と幸せが目の前にあるから
それに気付けた私は私を抱きしめる

寸評

朝から夜まで日々を精一杯生きること。大切なのは地位や名誉やお金じゃなくて、どこにいて何をしていても、変わらない穏やかな心と豊かな想像力があれば、どこにいても関係ない。豊かな想像力を持てば、強くなれて他人に優しくできて、幸せを連れてきてくれる。幸せだから笑っているのではなくて、笑っているから幸せがやってくるのだと、明るく生きるように勧めている。

便り

山形刑務所　龍齋

拝啓　寒さしむる季節ですがお元気ですか
白い紙の上にペンを走らせている
あなたの顔を想い浮かべ
身体を想いやりながらペンを走らせている
父の　母の　兄弟の　そして
離れて暮らす大切な人の
健康で幸せな日々をただ願って
ひたすらにペンを走らせている
何かお変わりありませんか
不安な出来事の多いこの世の中で
あなたの無事を祈りながらペンを走らせている
こちらは元気にやっています
自分の無事を伝えて
少しでも安心してもらえるように
あなたの気持ちを想いペンを走らせている
そうしてあなたにも無事でいてほしいと
願いを込めてひたすらに
ただひたすらに
こちらの気持ちとは裏腹に
便りの返事はやって来ない
何かあったのではと不安にかられ
そわそわ　そわそわ　落ち着かない
そんな時にはまずひと呼吸
心を落ち着け自分に言い聞かす
便りがないのは息災の証し
慌ただしい日常の中で
忙しくも元気にやっているという証拠
焦らず　怒らず　求め過ぎず
想いはきっと伝わっている　大丈夫
ただあなたの健康と無事を祈って
一つでも多くの幸せを願って
私は今日もただひたすらにペンを走らせる

寸評

「白い紙の上にペンを走らせているのは」父母や兄弟、離れて暮らす大切な人に手紙を書いているのだ。健康で幸せな日々を願いながら、ただひたすらに手紙を書いている。しかし、こちらの気持ちとは異なり、返事の便りはない。それでも「便りがないのは息災の証し」だと考えて、さらにペンを走らせる。返信のない相手への思いが切ない。

自分らしく

福島刑務支所　I・K

頑張ってるのに思うようにいかなくて
壁にぶつかって自信を失って
空回りして焦って
何を信じてどこへ進むべきか
何のために生きているのか
わからなくなる時もある
誰かに振り回されて
自分の気持ちに嘘をついて
不安になって怖気づいて
何も出来ない自分が嫌になって
意地ばかり張ってしまう時もある
それも含めて自分
たくさん出来ない事があっても
たったひとつ出来る事はある
わからない事がたくさんあっても
知ろうとする事は出来る
周りの人が順調に見えても
自分の道がある
失敗を避けられなくても
学ぶ事は出来る
ダメなところがあるから
よいところが輝き
辛い事があるから
喜びを感じられる
うまくいかなくても
何度も立ち上がる事は出来る
明日がわからなくても
今日を精一杯生きる事は出来る
どんなに辛い事があっても
どんなに悲しい事があっても
自分を大切にする事
出来る事をコツコツ続けて
いつか自分という
自分らしい花を咲かせよう
流した涙は絶対に無駄にはならない
たったひとつの勇気が
明日を諦めない気持ちが
未来を変える

寸評

人間は生きていると、いろんなことがある。他人と比較すると、何もできない自分が嫌いになって、意地を張ったりする。しかし、すべてが順調にいくことはない。周りの人が順調でも、自分なりの道があるはずだ。自分らしく生き、自分なりの花を咲かせることが大事だと訴えている。

前向いて笑顔で

福島刑務支所　I・A

隣の芝生は　いつだって　真っ青
それが　どれほど手をかけて育てられたか
なんて知りもせず　知ろうともせずに
指を銜えて羨むばかり
　そんな日々とは　もうサヨナラ
今この瞬間の自分にしかできないことを
やってみよう　始めてみよう
　誰も教えてくれはしない　この世は肌で
感じてみないと　わからないことだらけ
希望なんて持てない　第不公平かつ理不尽で
満ちている　関わりはいつでも断ってしまえる
それならば　世の中なんてそんなものと
笑い飛ばして　生きてく方が　きっといい
　優しすぎる　あなたに伝えたい
不誠実で不義理な人が大手を振って歩き回る
割り切れなくて　不可思議で複雑怪奇な現実
泣いても喚いても　何の足しにもなりゃしない
誰も助けてくれやしない　それならば
　自分でどうにか　するっきゃない
努力が足りないと言われても
公平さがないと思うなら　理不尽さに押し潰されても
自分自身を　救うため
　幸せになるために　弱音を吐くより
笑っていよう　明るく楽しくいた者勝ち
　世の中“正しさ”なんてない。“普通”もない
その人それぞれの正しさがあるだけ
　真実も嘘も時として残酷すぎるもの
けれども　光も希望も存在するから

何度だっていつからだって誰にだって
やり直せるチャンスはあるから　大丈夫
　できることから　目の前のことから
一つずつ　一歩ずつ　進んでいけばいい
　いつか理想の自分に出逢える日が
必ず　来るから　前向いていこう
だから　ほら　笑おう

寸評

「隣の芝生」を羨んでいるだけでは何の進歩もない。自分にしかできないことを始めてみようと、前向きに笑顔で生きることを示唆している。たとえうまくいかなくても、チャンスは必ずやってくる。他人のことを気にかけて、他人と比較するのではなく、目の前のことから一歩ずつ進んでいけばいいと励ましている。

短歌の部

審査員

「橄欖」運営委員

「橄欖」宮城支部代表

日本歌人クラブ会員

宮城県芸術協会　文芸部運営委員

宮城県歌人協会　「橄欖」代表

伊藤　久子　先生

宮城刑務所　O・M

囚徒達医療ガウンの縫製に平和祈りてミシン走らす

寸評
コロナ禍の医療ガウンを縫っている作業の様子が見え、動きがある生き生きした作品になっています。自身の労働が活写されている。

青森刑務所　鳴寂

歓声が響き渡れりたくましき子の逆上がり夏空を蹴る

寸評
逆上がりをした子供の足が夏空を蹴るという表現が功みです。運動会でしょうか？

青森刑務所　夢幻齋

夕立の去りて暮れゆく黒雲に赤き夕陽は影絵の如し

寸評
黒雲に陰れた夕陽の情景を鋭いタッチで表現し、結句「影絵の如し」が生きています。

宮城刑務所　W・S

夕陰の少し傾く甃にたまれる落葉みな乾きおり

寸評
結句の「みな乾きおり」の着眼は、さりげないが詩情がある。

青森刑務所　S・R

十年ののちも今なおみちのくは人も大地も震え止まざる

寸評
震災から十年、十年経っても尚、地震はたびたびやってくる。いつまでなのかという感懐でしょう。

人を殺め震える腕をおさえつつ乳の香のする吾子にすがりき

宮城刑務所　桜子

寸評
結して明るい歌ではありませんが、「乳の香のする吾子にすがりき」正直に自身の弱さをさらけ出しているあたりに、すくいが見えました。

ひび割れし吾が歳月よ手のひらの柘榴は重し髑髏の如く

宮城刑務所　K・Y

寸評
髑髏と言う比喩に一瞬どきりとさせられますが、初句の「ひび割れた・・・」の出だし、作者の心のうつ積など、複雑さを読みとることが出来ます。

盂蘭盆のしづもるさ夜に老囚の部屋より読経の声の漏れ来ぬ

山形刑務所　弘雀（美峯）

寸評
盂蘭盆に服役囚が経を唱えている静寂が伝わってくる。亡き人への供養か。

翔ぶ力いま少し出せ薄ら陽に蜻蛉ゆっくり堀を越えゆく

福島刑務所　N・K

寸評
蜻蛉を励ます優しい光景が浮んできます。作者の眼のつけどころ秋を思わせます。

添える手の温もり嬉し看護師の笑みに癒やされ咳の治まる

宮城刑務所　シオン

寸評
看護師の手の温もりと笑顔に癒された様子が具体的に詠まれています。

最後なる旅と想いて城址の大仏のごとき雲見上げる

秋田刑務所　N・Y

寸評

「大仏のごとき雲」が大らかで良いし城址もいい雰囲気を出しています。

不意を突く揺れに記憶を呼び起こす忘却など無く何年経ちても

山形刑務所　天聖

寸評

東日本大震災から十年、今年も地震は多かった。忘れることは出来ない。短歌には詠んでおくべき災害です。

独房の窓から覗く望月に祈るでもなくただ手を合わす

山形刑務所　K・Y

寸評

おのずから満月に祈りたくなった様子ですが、否定しています。でも、結句が真摯です。

自転車の轍いくつも公園に頑張った証応援してるよ

山形刑務所　N・K

寸評

自転車乗りの練習した跡がある。子供だろうか、作者の優しさが結句に見えてくる。

朝はやく部屋の窓辺に小鳥きて囀る声は「キビシー」「キビシー」

山形刑務所　風来坊

寸評

この下句、ひよどりだろうか「キビシー」のリフレインがユーモラスで明るい。

福島刑務所　Y・D

母の愛知らずに育つわれなれど同じ寂しさわが子にさせて

寸評
哀しさだけが訴えられているが、事実は風情を呼ぶ。具体性が欲しいけど反省している。

福島刑務支所　U・N

刑庭のあちらこちらに咲く花を見たいけれどもよそ見が出来ず

寸評
花の好きな作者、整列、行進なのか真面目に従っている様子に感心する。

福島刑務支所　F・H

香ばしいバタートースト一杯のあついコーヒー夢みた聖夜

寸評
狭い獄舎での生活、美味そうな聖夜の食卓を想像していて、具体的に詠み映像が理解出来る。

宮城刑務所　力風

ワクチンの予約取れぬと友の声獄で先打ち心苦しく

寸評
友より優先されて打ったコロナワクチンに申し訳なさそうな心情が出ている。

俳句の部

審査員

現代俳句協会宮城県支部幹事
宮城県俳句協会常任幹事
宮城県芸術協会委員

鈴木　三山　先生

夕焼けをグラスにそそぐディナーかな

山形刑務所　雨音

寸評
夕焼けの見えるレストランで夕食をしているところだろうか。グラスに注がれたのは紅ワインかな。そこで夕焼けがグラスに注がれたようだとした表現が見事である。

癌に逝きし妻の風筝鳴りつづく

宮城刑務所　K・Y

寸評
愛する奥様を癌で失った悲しみが、鳴り続ける風鈴に込められているようで胸を打たれる。

月天心咎ある吾を照らしけり

山形刑務所　龍齋

寸評
月が煌々と天上に輝いている。まるで咎を負ってしまった自分の心の闇までも照らすかのように眩しかった。

無観客かわりに蟬が大声援

福島刑務支所　K・A

寸評
今年の東京オリンピックは、コロナ禍のため無観客での開催という、かつてないオリンピックとなってしまった。しかしその無観客に代わるかのように蟬が大声援をしてくれたのである。

花びらを見上げ幼なの仁王立ち

青森刑務所　鳴寂

寸評

桜が満開の時に幼い子供を連れて花見に出かけたのだろう。まだよちよち歩きなのに、花びらを見上げたまま立っている姿が頼もしく、仁王立ちだとしたのであろう。

靴をそっとかくして笑ふ母

宮城刑務所　シオン

寸評

農作業などで苦労した母は、寒い季節になると靴になってしまう。そんな苦労を隠すかのように靴の手を隠して気丈に笑う母に、心の痛みを感じる作者に共感を覚える。

前略と書いてしばしの蝉時雨

福島刑務所　N・K

寸評

久しぶりに手紙を書こうと思い、前略と書き出したのだが後が出て来ない。するとあちこちで蝉の鳴いている声に気付き、懐かしい思い出が蘇ってきたに違いない。

網戸抜け風のお供は蝉の声

福島刑務支所　I・J

寸評

部屋に閉じこもっていると暑くてたまらないが、網戸から涼しい風が吹き込んできた。それと共に蝉の声が聞こえてきたのである。風のお供が良い。

虎落笛遠くに在りしふるさとよ

福島刑務支所　S・M

寸評

寒くなると垣根や柵などに吹き付ける強風が立てる音のことを虎落笛言うが、都会でビル風などには使わない。作者にとっては遠い故郷を思い出させる音になっているようである。

親不孝詫びる片手に菊一輪

青森刑務所　夢幻齋

寸評

親不孝ばかりだった自分を責める気持ちが表れている。墓前に詫びながら手にした菊一輪が眩しく目に浮かんで来そうである。

独房にススキ揺らした風が入る

宮城刑務所　力風

寸評

独房に入っていると季節の移ろいも余り感じられないのかも知れない。しかし開けた窓から秋の風が入ってきた。この風は広い原っぱの芒を揺らして来た風なのだとの思いがしたのだろう。

蜩が獄の日暮し締めくくる

宮城刑務所　O・M

寸評

蝉の種類はいろいろあるが、どちらかというとみんみんが鳴き、油蝉が鳴いて、夕方頃に蜩が鳴き始めるのが多いようである。単調な獄中生活の慰めでもあろう。

夕立や路地にぽつんと三輪車

宮城刑務所　伏龍

寸評

日中はいろんな人たちの話し声で賑わっていた路地も、夕方には寂しくなる。まして夕立など来ようものなら、人の気配もなくなろう。そんな中に三輪車がぽつんと取り残されていた。

虹二重告ぐ人居らず旅の空

宮城刑務所　A・H

寸評

一人旅だろうか。たまたま二重の虹がかかった。珍しいし綺麗だし、側に誰かが入れば即座に告げたことだろう。侘しさが強調されるようである。

雷鳥を見し昂りの消えやらず

秋田刑務所　N・Y

寸評

雷鳥も絶滅危惧種の鳥かも知れない。日本アルプスなどで見かけられるが、作者もかつては登山したことがあるのだろう。興奮ぶりは十分に伝わる。

母衣蚊帳に守られし子の肌やわし

山形刑務所　王兎

寸評

昔は赤ん坊の居る家庭には必ずと言っていいほどあった母衣蚊帳も、今ではあまり見かけなくなってしまった。赤んぼの元気で艶やかな肌は、いかにも柔そうである。

行進で噴き出す汗に蝉の声

山形刑務所　鵜林檎

寸評

行進は毎日の日課であろうか。夏の暑い時は少し歩いただけでも汗が噴き出てくることだろう。その時聞こえてきた蝉の声が汗にしみ込むように感じられたのだろう。

目覚めれば常の獄舎や夏の空

福島刑務支所　F・H

寸評

いつの間にか転寝してしまったようである。おそらく楽しい夢など見ていたのかも知れないが、目が覚めてみるといつもと変わらぬ部屋の中だった。だが夏の空は青空だったようである。

花束を絵に描き送る母の日に

福島刑務支所　M・M

寸評

昔は母の日にはいろいろと贈り物をしていたに違いない。しかし今は花束を絵に描いて送るしか出来ない。贈物とは金品だけがいいのではない。気持ちが大事と思わされる。

川柳の部

審査員

川柳宮城野社同人

宮城県芸術協会会員　佐藤　岩男　先生

いくつかの角を曲がって角が取れ

福島刑務支所　K・A

寸評

おもしろい表現であり、とても佳い句です。いろいろな角にぶち当たりますが、やっぱり成長の糧にはなっているのでしょう。

人類を生かす地球に何返す？

山形刑務所　激照北

寸評

地球は人類のために数々の恩恵を与えてくれました。それに対してわれわれ人類はありがとうも言わず、利用するだけ利用して、地球は怒っているのでは。

初孫の写真相手ににらめっこ

山形刑務所　K・Y

寸評

最愛の初孫との写真とのにらめっこ。ほほえましくもあり、ちょっぴり悲哀も感じます。孫にかまってもらえる時間はそれ程ありません。がんばって孫とじゃれあえるよう。

生きるのが下手くそだけど逃げないぞ

福島刑務支所　E・M

寸評

生きるのが下手（不器用とも言います）な人は正直な人かもしれません。恰好をつけたりせず、素直に生きることでしょうか。

ガラス越し母の笑顔にほっとする

宮城刑務所　K・Y

寸評
ガラスを通してもお母さんのにおい、優しさが感じられます。残念ですが、父親よりも何十倍も母親でしょう。

優しさと笑顔でこころ晴れわたる

宮城刑務所　伏龍

寸評
相手の方が男であれ、女であれ、はたまた子どもであれ、笑顔でそれも優しく話しかけられると心も落着き、すっきりした気持ちになれます。いつもこうありたいのですが。

また来るね！手を振る母に頬ゆるむ

福島刑務支所　N・A

寸評
お母さんがやっとこ逢いに見えられ、それでも元気そうなわが子に逢え一安心。また来るね！と手を振る心情にあふれる句です。

待ってるねその一言で頑張れる

福島刑務支所　Y・M

寸評
「一日も早く帰ってきなさいよ。待ってるからね。」その声が背中を押してくれるのでしょう。辛いことでも切り抜けられるでしょうから。

手紙ならごめんと書ける魔法かな

盛岡少年刑務所　Y・M

寸評
手紙や電話など、相手の顔が見えないと素直な気持ちになって、素直に本音で話すことが出来るようです。顔を見ると腹が立ったり、見栄を張ったり。

食事時響く噛む音啜る音

青森刑務所　鳴寂

寸評
静寂な黙食の中で響くものを食べる音。とても佳い着想です。食べる音、啜る音と重ねたことで、みんなの表情も読みとれます。

子に逢って禊涙で心澄む

秋田刑務所　K・M

寸評
子どもは親が大好きです。ただ、批判的になり、親に反発します。理想の親というものと、現実としての親の姿とのギャップからでしょうか。基本的に親は大好きです。

歳重ね父に似て来た笑い皺

山形刑務所　九州男

寸評
小さい頃から、父親の顔、一挙手一投足を見て育ち、あゝはなりたくないとの思いが・・・。ところが、父親の歳を越え気がつくと、顔も所作も性格もそっくりに。

服装に合わせて選ぶ柄マスク

山形刑務所　N・K

寸評
おしゃれですね。仲間にも服装に合ったマスクの方が居ります。奥様の手作りだそうです。それにしてもマスクの似合う人もそうでない人も居りますね。

麦茶よりお茶が恋しい肌寒さ

山形刑務所　十三郎

寸評
寒い時には熱々のお茶（出来ればほうじ茶）が何よりですね。若い人は、ホットコーヒーとか言うのでしょうが。

山形刑務所　鴉林檎

イメージと動きが合わず老いを知る

福島刑務支所　W・R

いくたびも雪の深さを尋ねけり

福島刑務支所　I・A

カレーの日君の笑顔を思い出す

福島刑務支所　A・H

変わりたいほんとの私見てほしい

福島刑務支所　M・M

戻れたら無邪気に泣けたあの頃に

寸評

亡くなった母がよく言ってました。「歳とって見ないと分からないよ」と、つくづくそう思います。ジャンプや全力疾走が出来なくなり、最近は高い所に手がのびなくなりました。

寸評

雪国で生活したのは２０歳前後でした。びっくりしました。一晩で部屋の窓が低くなっているのですから。除雪車も今ほど頻繁でなかったので通行には苦労しました。

寸評

カレーの好きだった彼ですね。カレーはよく出されるのですか？私もカレーは大好きです。レトルトですが、何かを加えて工夫しております。

寸評

いろいろなもので飾りつけてしまった現在の自分。それらを取り払って本当の自分の姿をみんなに披露したいという強い意志が感じられます。

寸評

戻れると思います。恰好悪くとも自分に素直に生きられるようがんばって下さい。「無邪気」とは文字どおり、邪気を追い払った姿でしょう。

文芸部門審査員総評

○作文の部

応募作品２５篇、一読して１０篇を残し、個々の作品を吟味した。「八月の向日葵」は文章のうまさ、発想の巧みさが群を抜いていたが、コロナ禍の一年を顧みると、医療用ガウンの製作を通じてコロナの問題と誠実に向き合うＨ・Ｋさんの作品が今年度の金賞にふさわしいと思った。Ａ・Ｒさんの「親孝行」は、毎週手紙をくれる母との交流から、自分の母に対するこれまでの態度を改め、母に恩返しをしようというピュアな気持ちに感銘を受けた。佳作の「初めて絵を買った日」は、読み終わって１日でも早く実家にある絵の元へ、この筆者を帰してあげたいという思いがこみあげてきた。ほかの２篇はスポーツを題材にしているだけに、さわやかな読後感が残った。入賞はしなかったが、Ｉ・Ａさんの「華の眠」は足の裏に植物の芽が出てそれが成長する度に厄災から難を逃れるというシュールな幻想がユニークだった。ただし、この題名は意味不明なので次点にとどまった。

原田　勇男

○詩の部

１７篇の応募原稿はそれぞれ読み応えがあった。大部分の作品がいかに生きて行くかという問いを主題にしている。世の中の現実は厳しいものがある。思い通りにいかないのが人生だが、その課題をどのように表現するか。他力本願ではなく自立の精神が必要だろうし、悲観的に考えるよりも何事も前向きにトライする方がプラスになるはずだ。

金賞の「約束の詩(うた)」はそのような課題と向き合い、自分の言葉で励ましのメッセージを発する。また、第１連から第５連まで内容によって行分けをしている。構成がしっかりしているのも詩の基本である。とかく散文のようにだらだらと書かれている作品が多いなかで、この詩の構成は際立っていた。自分の思いを表現するに当たって、どうしたら読む人に的確に伝わるかを考えてみることを望みたい。詩は歩行ではなく、時には跳躍する表現も必要である。

原田　勇男

○短歌の部

東日本大震災から今年で十年、コロナ禍も二年になる。今年度の短歌作品は、数も例年より多く皆懸命に詠んでいて、理解の出来ない作品は無かった。レベルが高かったと言えるでしょう。震災を詠んだ作品や、コロナを詠んだ作品もあり、外に向けた思考のあった事は素晴らしいと言えるでしょう。唯、具体性が無く観念的（つまり頭の中で考えた）だけの作品が多く。読む人の感動を呼ばない作品も多く残念でした。嘱目詠も無かったのは環境のせいでしたうか。これからも事物を見て作歌する事をお勧めします。

伊藤　久子

○俳句の部

素晴しい作品が多く受賞句を選ぶのに途惑いました。多くの佳句に出合えて感激です。季重なりもあまり多くなくて、俳句のスタイルもいい作品が多かったと思います。

残念なことがひとつありました。それは誰にでも知られている有名な句を、自分の句として投句されていたことです。もしこれが有名な句でなくて、選者も気付かない作品だとしても、他人の作品を自分のものとすることは出来ません。有名句を参考にすることは大いに結構なことですので、俳句の上達に是非お薦めします。

今テレビで夏井先生が大人気ですが、俳句は楽しいものですし、何より心を豊かにし、時には慰めてくれます。これからもよろしくお願いします。

鈴木　三山

○川柳の部

６４人の方から１４７句の作品を頂きました。佳い句が多くて選ぶのが大変でした。川柳では、詠み手（作者）の心情が読み手（鑑賞する人）に伝わることが大切になります。よく言われることに、詠み手は「起承転」まで詠んで、「結」は読み手に考えさせなさいということがあります。川柳では、ただ単に自然を詠むのではなく、人間のようす、生き様などを中心に置きなさいとも言われます。最後に、川柳を作るときは、５・７・５の音数（数字ではありません）を守って下さい。そうでないとリズムが悪くなり、口ずさんでも落着きません。表現は口語体、つまり話ことばを使って下さい。文語体は不要です。また、かなづかいも、現代かなづかいでお願いします。

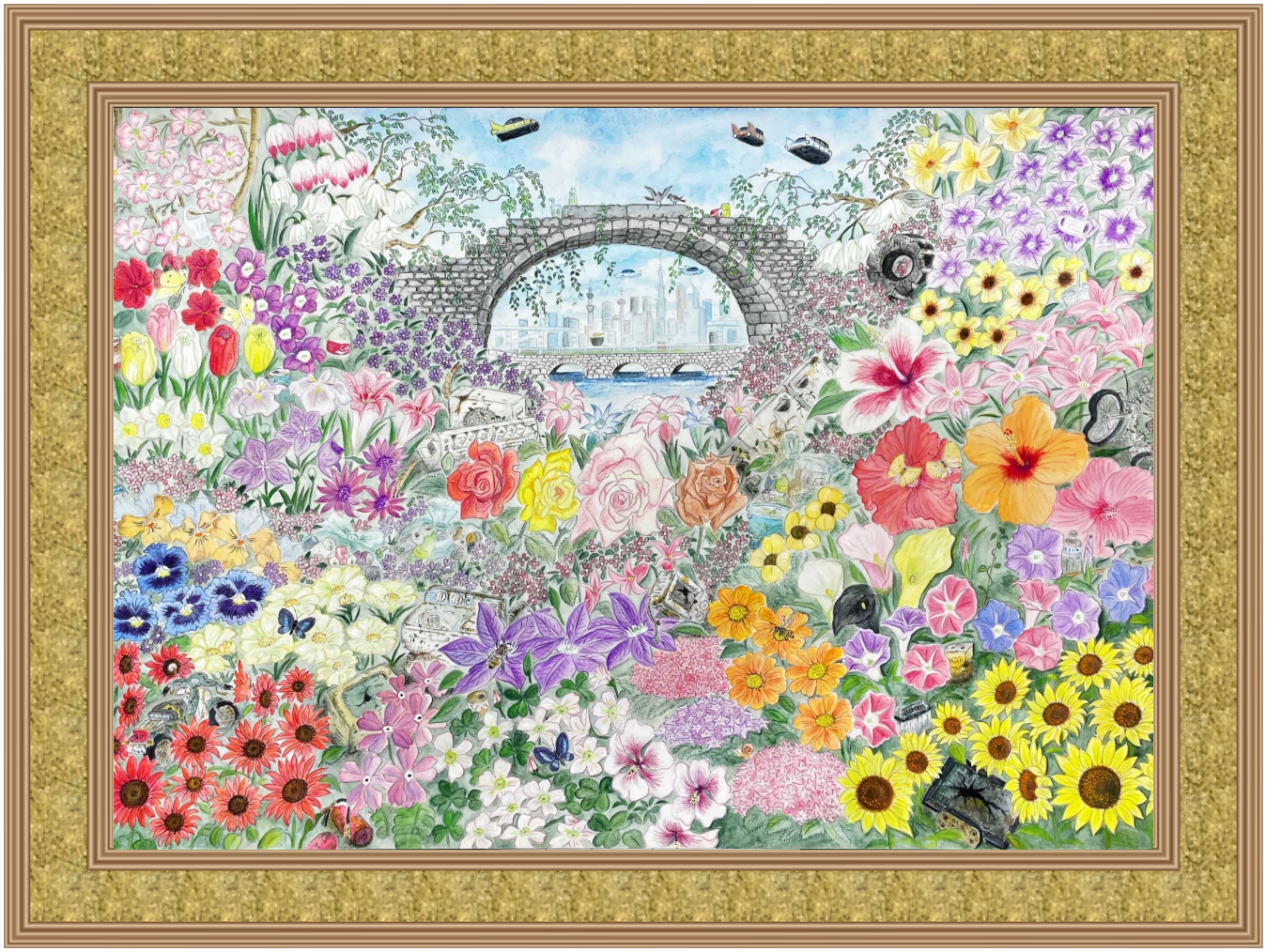
佐藤　岩男

絵画の部

審査員

宮城県芸術協会運営委員

枡澤　怜　先生



21XX年　　山形刑務所　　絵夢・M

寸評　　美しい花々に囲まれた未来の都市の温かい雰囲気を見事に表現した。

夢幻神社　　宮城刑務所　　O・M

寸評　　細密に描かれた夢のある神社。

素戔嗚尊八岐大蛇退治　　福島刑務所　　S・Y

寸評　　大蛇退治の様子が躍動的に美しい色彩でまとめた。

虎の像に乗ってガオーをしている女性

福島刑務所　　S・Y

寸評

虎に乗った女の子の表現が可愛らしく魅力的。

Universal compassion ~終熄~

山形刑務所　　GAMI

寸評

波羅僧揭諦のお面を中心に放射線状に配した手が印象的。

青森ねぶた祭　　青森刑務所　　我慢の樂

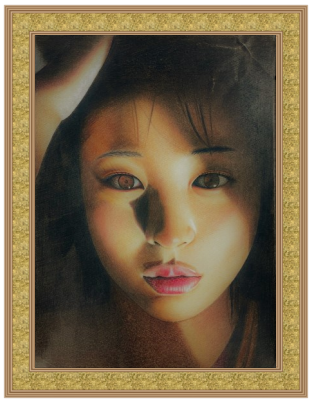
寸評　　ねぶた祭の武者絵がよく表現されている。

花と梟

福島刑務支所　　Ｉ・Ａ

寸評

2羽の梟を中心に美しい花々の表現が見事である。



朝日を浴びて

山形刑務所　　Ｍ・Ｋ

寸評

朝日に照らされた少女の表情が美しい。

八月六日

盛岡少年刑務所　　Ｔ・Ｙ

寸評

焼け残った原爆ドームの姿が見事に表現できた。

～コロナ収束を願って～

福島刑務支所　　Ｅ・Ｍ

寸評

モデルになった女の子の表現がいきいきしている。

水の都

宮城刑務所　　Ｓ・Ｓ

寸評

水の都ベニス風景を美しく表現した。

ポスター・カレンダーの部

審査員

宮城県芸術協会運営委員　鈴木　智枝　先生

１０月　ハッピーハロウィン　福島刑務支所　　Ｋ・Ａ

寸評　　美しく、楽しいカレンダーです。細やかな仕事ぶりに感動です。

避難訓練

山形刑務所　　檸檬牛乳

寸評

言いたいことがよく伝わります。レタリングされた文字も美しい。色数も制限してありスッキリした画面です。

感動の東京五輪

青森刑務所　　我慢の樂

寸評

金メダルの喜びがストレートに伝わります。文字がゴシックでレタリングされるともっと良いと思います。

私のチョコをうけとって

山形刑務所　　U・S

寸評

カレンダーとしての必要条件をすっかり満たしています。丁寧な仕事ぶりで色彩も納得です。

毛筆の部

審査員

東北書道会副会長　鈴木　霽月　先生

老子１９章　絶聖棄智民利

宮城刑務所　　雅凰

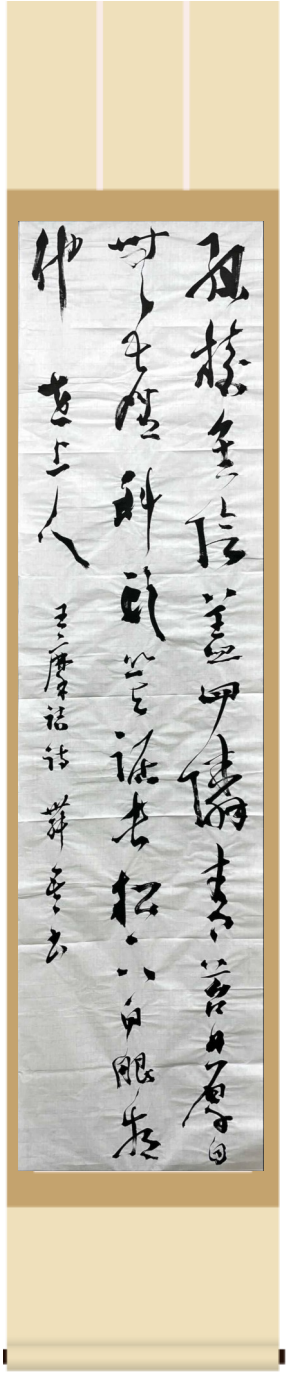
寸評

北魏調の力強さがみなぎる作。用筆、運筆ともに素晴らしい。

摩訶般若波羅蜜多心経
觀自在菩薩行深般若波
羅蜜多時照見五蘊皆空
度一切苦厄舍利子色不
異空空不異色色即是空
空即是色受想行識亦復
如是舍利子是諸法空相
不生不滅不垢不淨不增
不減是故空中無色無受
想行識無眼耳鼻舌身意
無色聲香味觸法無眼界
乃至無意識界無無明亦
無無明盡乃至無老死亦
無老死盡無苦集滅道無
智亦無得以無所得故菩
提薩埵依般若波羅蜜多
故心無罣礙無罣礙故無
有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸佛依
般若波羅蜜多故得阿耨
多羅三藐三菩提故知般
若波羅蜜多是大神呪是
大明呪是無上呪是無等
等呪能除一切苦真實不
虛故說般若波羅蜜多呪
即說呪曰
揭諦揭諦 波羅揭諦
波羅僧揭諦 菩提薩婆訶
般若心経

般若心経　福島刑務支所　　O・C

寸評　　細部にわたり丁寧にまとめ上げた力作。

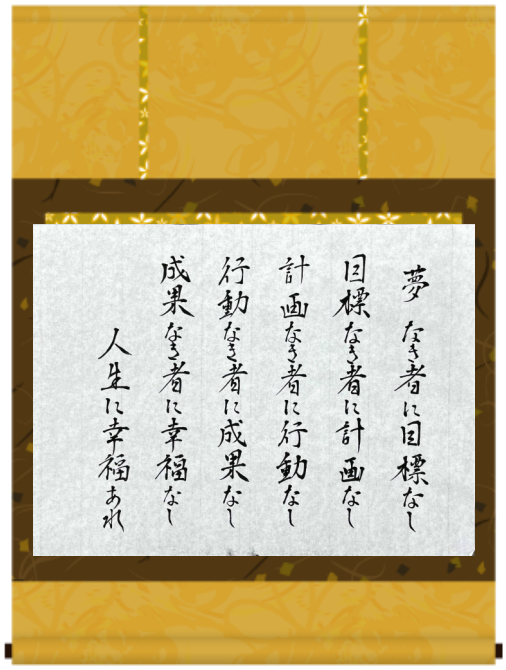


王摩詰詩

宮城刑務所　　舞吾

寸評

気負い無く淡々とした表現の作。

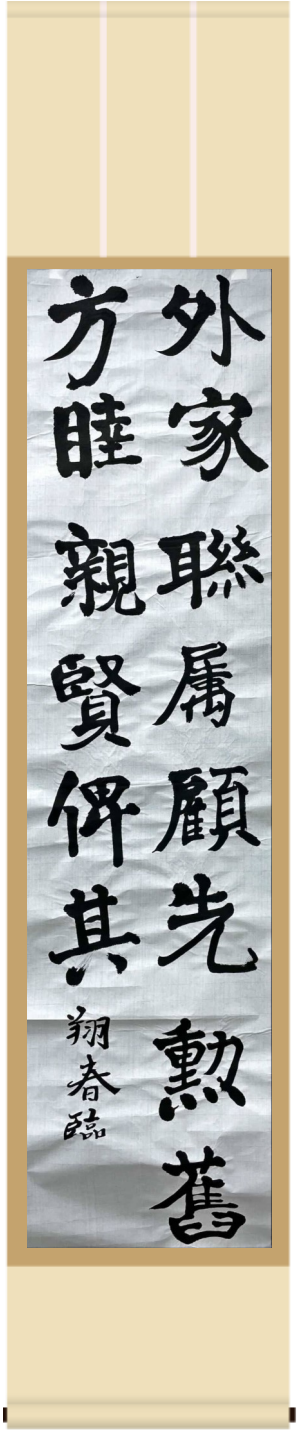


夢（夢追う人生）

青森刑務所　Ｓ・Ｓ

寸評

自己の思いを美しく整然と表現。

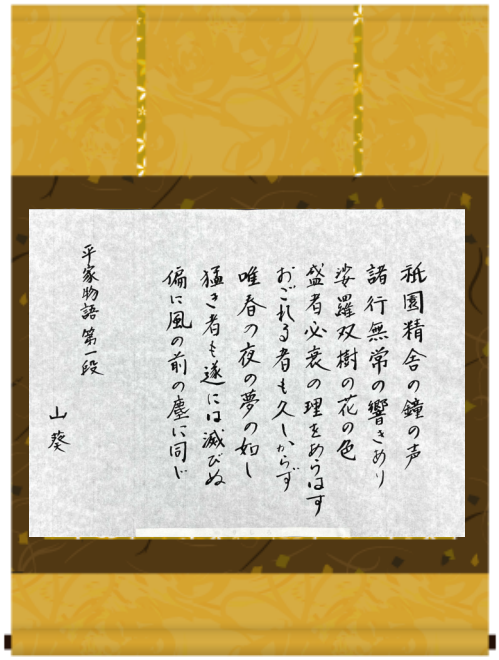


健中告身帳

盛岡少年刑務所　　Ｈ・Ｋ

寸評

原帖の特徴を良く表現している。

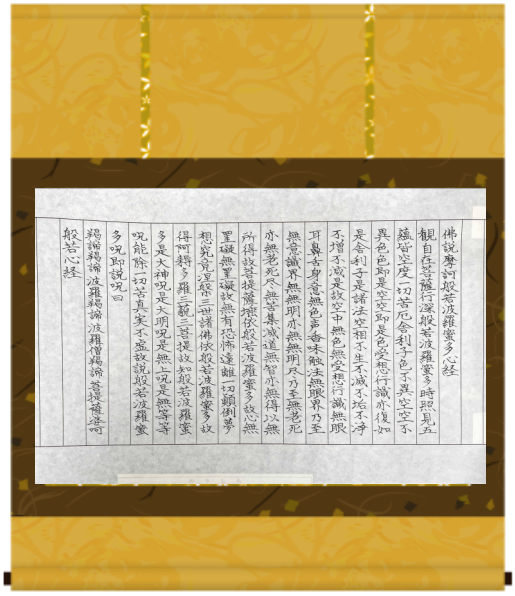


平家物語

山形刑務所　　山葵

寸評

丁寧に書作し構成も良い。

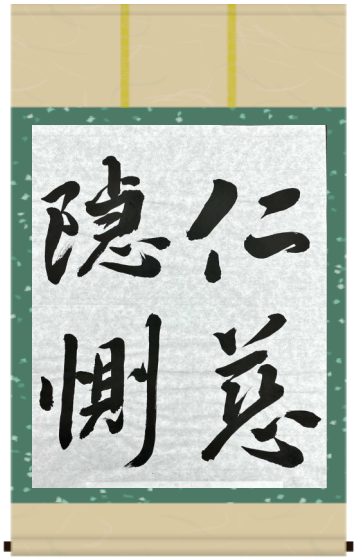


般若心経

福島刑務支所　　M・M

寸評

線に抑揚があり統一感のある作品。



仁慈隠惻

秋田刑務所　　Y・N

寸評

伸びやかな線で丁寧にまとめた。

仙台「孟法師碑臨書」

宮城刑務所　　義松

寸評

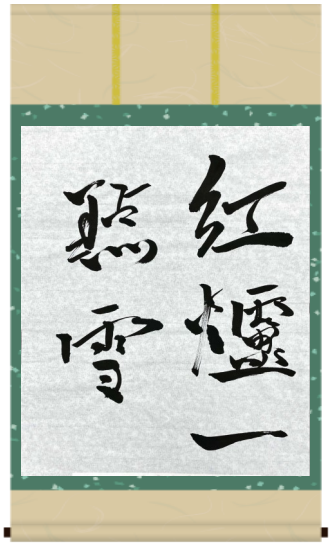
楷書の基本を修得されており、練度の高い作品。

牛蕨造像記

盛岡少年刑務所　　W・T

寸評

力感あふれる作品。



紅

山形刑務所　　Y・T

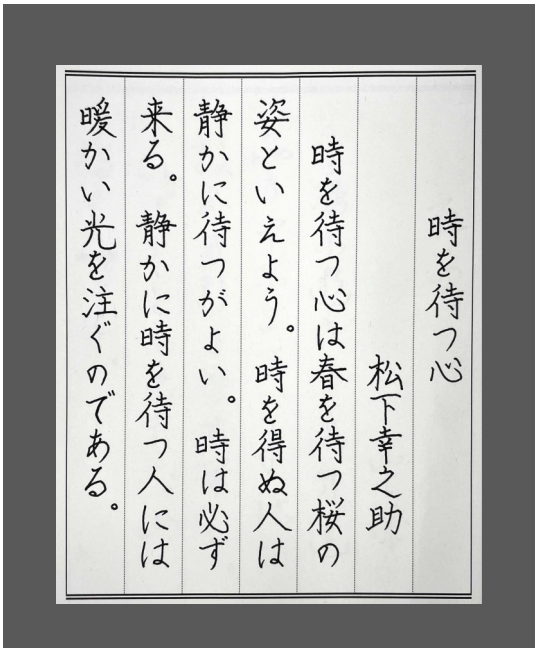
寸評

筆遣いが素晴らしい。

硬筆の部

審査員

東北書道会副会長　鈴木　霽月　先生



時を待つ心

松下幸之助

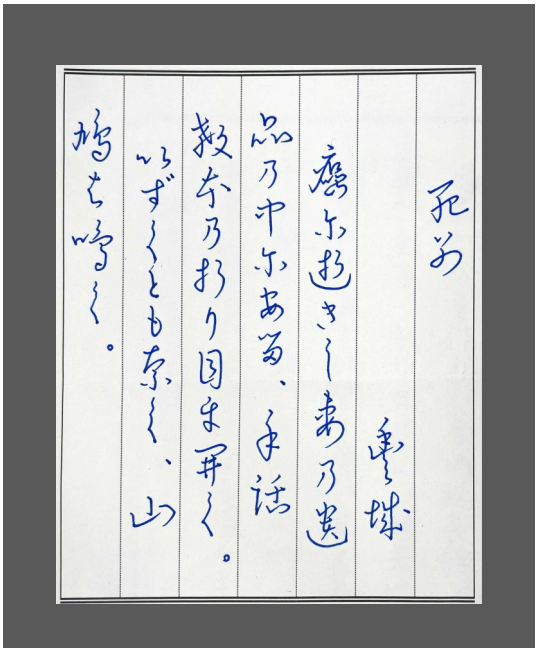
時を待つ心は春を待つ桜の姿といえよう。時を得ぬ人は静かに待つがよい。時は必ず来る。静かに時を待つ人には暖かい光を注ぐのである。

時を待つ心

山形刑務所　寒桜

寸評

慎重に一字一字を丁寧に書いている。



死別

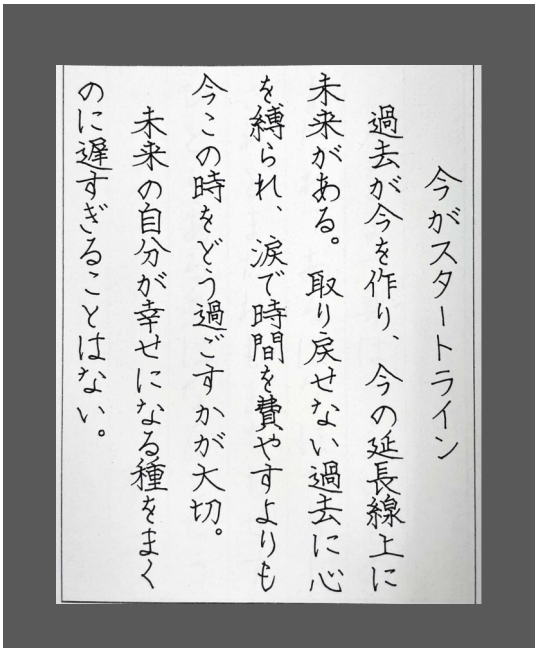
妻の病を知らせる電報の文句の中に、手紙数枚の封切り目を開く。いずれにも苦く、山の如き嘆き。

死別

宮城刑務所　　K・Y

寸評

奥様を癌で亡くされた心情が伝わってくる。構成も素晴らしい。



今がスタートライン

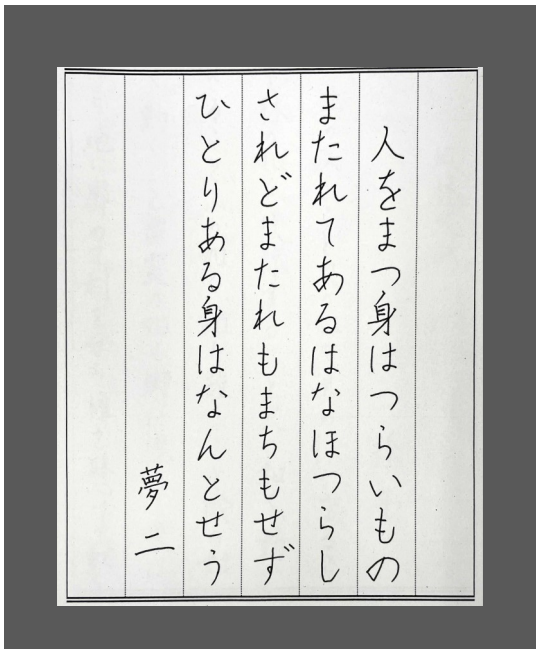
過去が今を作り、今の延長線上に未来がある。取り戻せない過去に心を縛られ、涙で時間を費やすよりも今この時をどう過ごすかが大切。未来の自分が幸せになる種をまくのに遅すぎることはない。

今がスタートライン

福島刑務支所　　M・M

寸評

これからのスタートに向かって決意が感じられる力強い字。

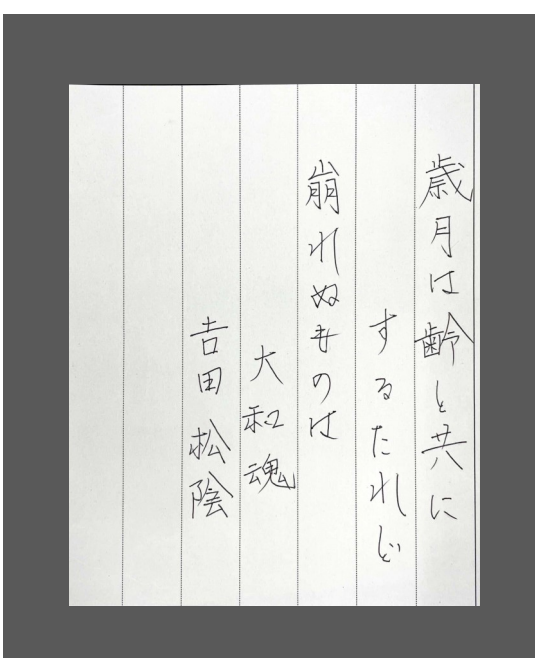


夢二

青森刑務所　　鳴寂

寸評

平がなを中心にした文字構成で淡々とまとめ上げた。

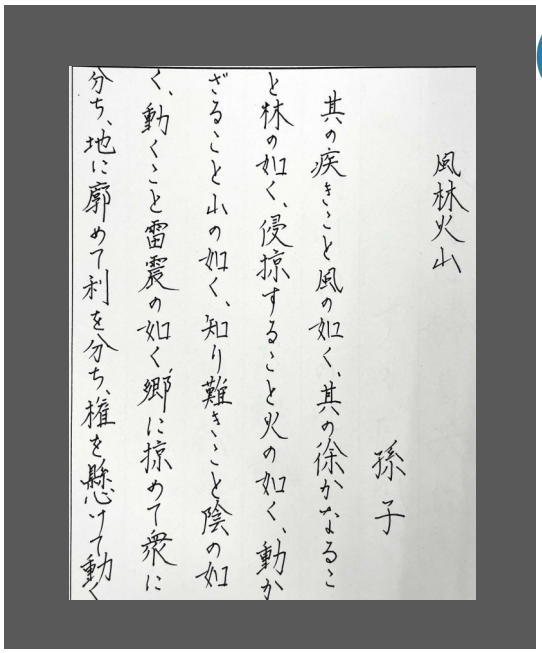


吉田松陰　覚悟の仕方

秋田刑務所　　O・S

寸評

伸びやかな筆線で慎重に書き上げた作。



風林火山

盛岡少年刑務所　　I・M

寸評

有名な文章を丁寧にまとめ上げた。

書画部門審査員総評

○毛筆の部

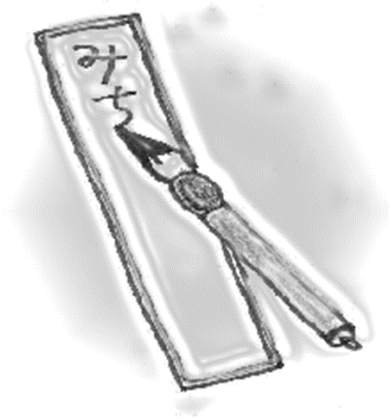
昨年にも増して出品点数・内容共に充実している感がある。今年は特に般若心経の出品が多く、多字数の作品に根気強く時間をかけて挑戦する姿を垣間見ることができた。

鈴木　霽月

○硬筆の部

現在の自己の思いを丁寧に書き綴った作品が多く、作品の構成も工夫をされて書作していた。

鈴木　霽月



○ポスター・カレンダーの部

いずれが賞になっても良い、甲乙つけがたい作品が多くありました。カレンダーの中に絵柄が多く強すぎるものがあり残念です。ポスターは少ない文字（文）で表現した方がわかりやすいものです。以上気になった所を書いてみました。

鈴木　智枝

○絵画の部

今回は細密な表現の作品が特に印象に残ったが、なかでも金賞に選ばれた絵夢君の作品は沢山の花々を一つずつ細密に描き魅力的であった。佳作の作品の中にも金、銀におとらぬ秀作が多く、印象に残る審査であった。

吉田　利弘

編集後記

本年度も、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なるご協力のもと、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

仙台矯正管区

仙台矯正管区